

田中康夫の



「砂防ダム」

16

国土交通省水管理・国土保全局
砂防部保全課は7月10日、その前
日夕刻に「長野県南木曾町で発生
した土砂災害に対する専門家派遣
について」をプレスリリース。同

午後、町役場で報道各社の取材に
応じ、土石流が起きた梨子沢の上
流3カ所の砂防ダムが土砂で埋ま
っている事を明らかにした。「室
長らによると、梨子沢の上流には
2つの支流がある。砂防ダムは支
流にそれぞれ1カ所と2カ所ある
が、いずれも土砂等で満杯だった。
土石流は各砂防ダムを乗り越えて
合流し、梨子沢を下ったとみられ
る」と報じられました。

が、件の「官製発表」には、敢
えて「曖昧」にしている部分があ
ります。3つの砂防ダムは、今回
の「ゲリラ豪雨」発生以前に既に
土砂で満杯だった蓋然性が極めて
高い厳然たる事実を、です。

「山地・溪流から下流の河川への
土砂・岩石の急激な流下を防止す
る為に設ける」と『大辞林』が記
す、砂防堰堤とも呼ばれる砂防ダ
ム。不可解な事には、竣工後に溜
まった土砂の浚渫・除去は全国
津々浦々、未だ嘗て実施された事
例が存在しません。「放置」し続
け、土砂が満杯となるや上下流に
新たな砂防ダムを新設する。それ
が日本の「砂防工学」なのです。

知事就任当初、旧建設省から出
向の土木部長と砂防課長がガラス

張り知事室で述べた「更に県下に
7千カ所、砂防ダムを建設せねば
なりません」の科白を想起します。
が、僕の就任以前から建設箇所は
1年間に100カ所以下。他方で
コンクリートの耐用年数は60年と
も。計画完遂時には既存の砂防ダ
ムを造り替えねばなりません。
「本当に全て必要な箇所ですか。
それとも、永遠の公共事業、確保
ですか。既存施設の堆砂の浚渫こ
そ先決では」。尋ねると二人は口
籠もり、顔を見合わせました。

2001年2月20日に発した
『脱ダム』宣言は、ダムを造
る・造らないの不毛な〇×式の二
項対立を超え、成長から成熟の21
世紀に相応しい「造るから直す・
守る・創る」公共事業の在り方を
問う宣言でした。が、その意識改
革は遅々として進みません。

堆砂の浚渫・護岸の補修・森林
の整備。これらを常日頃から怠ら
ぬことこそ、地元雇用を生み出す
地域密着型公共事業の治水・治山
の原点であるにも拘らず。因みに
浚渫は、重機を用いて1㎡辺り1
万円強で実施可能です。

農林水産省の外局・林野庁に於
いても、間伐や植林等の森林整備

費が年間予算に占める割合は驚く
勿れ1割未満。その大半は大規模
林道の建設費用や、谷止工と呼ば
れる砂防ダムよりも小規模工作物
の設置費用。何処も「創る」とは
対極のハコモノ行政です。

北海道日高地方を流れる沙流川
は、流砂で河口部が塞がり易い事
を意味するアイヌ語のサラハ葦
原に由来。チプサンケと呼ばれる
サケ捕獲の舟下ろし儀式をアイヌ
民族が行っていた中流域に建設さ
れた二風谷ダムは、想像を絶する
堆砂に直面しています。

竣工後100年間で550㎡と
想定していた堆砂量は、2007
年に1268㎡を達成。即ち
230年分の土砂が僅か10年間で
沈殿。同等の速度で進行すると、
総貯水容量3150㎡のダム湖は
後十数年で堤頂まで堆砂で覆い尽
くされ、激流・濁流・奔流が下流
域の居住地を襲う事態に陥ります。

が、今後は沙流川も安定期に入
り堆砂量は減少するから現時点で
の浚渫は不要と国交省は回答。科
学を用いて・技術を超えてこそ人
間の叡智。なのに、科学を信じ
て・技術を疑わぬ「科学的知見」
とやらが跳梁跋扈しています。

★次号の月号の発行口は8月号(第15金曜日)です。